清浦奎吾と吉嗣拝山

太宰府の文華
～公文書館だより⑬～

清浦奎吾（1850―1942）は、熊本県山鹿市鹿本町にある明照寺に生まれます。明治に入って司法省に出仕、元老山県有朋の側近として頭角を表し、貴族院議員を経て大臣を歴任、大正13（1924）年、ついには内閣総理大臣にまで上り詰めました。

一方の吉嗣拝山（1846―1915）は、町絵師吉嗣梅仙の長男として太宰府に生まれます。京都の画家中西耕石に弟子入りするも、役人の道を志し大蔵省や太政官に奉職しました。しかし、明治4（1871）年、暴風雨により倒壊した家屋の下敷きとなり右手を切断、出世を諦め、あらためて画業に従事しました。

一見関係性が見えないこの二人は、実は幕末期、お互いがまだ青年の時代に、豊後日田の私塾咸宜園で学んだ同窓生でした。

二人は、拝山は按摩、清浦は托鉢をして日銭をかせぎ学資に充てる苦学生であった点も同じでした。清浦が食べ残しておいた粟米を、夜遅く按摩から帰ってひもじさに我慢できなくなった拝山がこっそり食べてしまったという出来事を拝山は晩年述懐しています。

拝山は後年南画家として世間に名を馳せます。南画とは中国の南宗画に由来し、江戸時代中期以降日本で発展した画派で、「詩書画一致」といって、画中に記される漢詩とふさわしい書体、さらに詩の世界を表現した絵という、これらすべてが調和した総合芸術です。

後に、清浦は拝山生前の漢詩を集めた遺詠集に序文を寄せています。その中に「余かつて同じく南豊の咸宜園に学ぶ。往事を追想すれば、すなわち茫として夢のごとし。」（『古香書屋詩存』巻1）と記しており、清浦もまた拝山らと咸宜園で過ごした日々のことを懐かしく感じていたことが分かります。

吉嗣家に今も遺る資料の中に、明治35（1902）年11月、熊本県で行われた陸軍大演習のために、清浦が帰郷した際、拝山から菓子と手紙を受け取り、そのお礼として清浦が送った徽墨（中国安徽省産の墨）1函に添えられた手紙が含まれます。生前の二人の確かな交流の証として、大変貴重な資料です。

公文書館　朱雀　信城